



演題名：要介護状態と関連性のある疾患についての検討

演者名：百瀬彬、山口聡子、岡田啓、倉川佳世、並木大輔、加藤秀樹、山内敏正、南学正臣、門脇孝

Background

日本では高齢化に伴う要介護者の増加が社会問題となっている。介護予防を行っていくにあたり、介護リスクの高い者の特性を把握することは重要である。

Methods

厚生労働省が2013年に実施した国民生活基礎調査の匿名データの提供を受け、横断研究を行った。要介護認定の対象となる40歳以上を対象とした。また、入院・入所中の者は除外した。(対象者数56,948人、うち要介護者数1,838人)

40-64歳、65-74歳、75歳以上の各年齢区分について、単変量ロジスティック回帰分析を実行し、介護と関連する通院治療中の疾患を特定した(表2)。さらに、65歳以上の要介護者においては、「日常生活活動の遂行における自立度」により、重度介護状態と軽度介護状態に分類し、各疾患が重度介護状態との関連があるかどうかについてカイニ乗検定で評価した(表3)。

Results

全年齢区分で介護と有意(P値<0.05)に関連性がみられた疾患として、糖尿病、こころの病気、認知症、パーキンソン病、その他の神経の病気、脳卒中、その他の循環器系の病気、その他の呼吸器系の病気、関節リウマチ、骨粗しょう症、腎臓の病気、骨折、血液の病気が該当した(表2)。

年齢区分別の傾向は全体としては同様であったが、40-64歳における各疾患のオッズ比(OR)は高齢者におけるORよりも高かった(表2)。65歳以上の要介護者において重度介護状態に関連する疾患としては、認知症、パーキンソン病、脳卒中、虚血性心疾患、悪性新生物が該当した(表3)。

Conclusion

全国規模のビッグデータを使用して、介護と疾患との関連性について、網羅的に把握することに成功した。本研究は横断研究であり、因果関係の解明に至っていない点が今後の課題となる。

表2. 介護認定を目的とした単変量ロジスティック解析結果

Table with columns for age groups (40-64, 65-74, 75+), OR (95% CI), and P-value. Rows list various medical conditions like Diabetes, Heart Disease, etc.

表1. 年齢区分別、介護認定の有無別の特性

Table showing characteristics of individuals with and without nursing care certification, categorized by age group (65-74, 75+).

表3. 65歳以上の要介護者における各疾患と重度介護状態との関連性

Table showing the association between various diseases and severe nursing care status among those aged 65 and over.